

唐後半期における平盧節度使と海商・山地狩獵民の活動

新見 まどか

はじめに

太宗の「貞觀の治」、玄宗の「開元の治」と謳われ、榮華を誇った大唐帝国は、天寶一四載（七五五）、安史の乱の勃発によって大きく変貌した。乱後、唐朝廷は対外的にはウイグル・吐蕃の脅威に晒され、国内でも中央では宦官の専横、地方では藩鎮の跋扈に悩まされた。とりわけ藩鎮については、唐代後半から五代、宋代へと至る歴史展開との関連に注目して、既に多くの研究が蓄積されている。^{〔1〕}中でも現在関心が高まっている地域は、魏博・成徳・盧龍三節度使の「河朔三鎮」や、五代諸王朝を築く河東節度使等を擁した河北一帯である。これらの藩鎮に対しては、森部二〇一〇に代表されるように、中国内地のみならず東部ユーラシア規模の視点を導入した、新しい研究が行われている。その結果、遊牧民やソグド人などの諸勢力が、集団で藩鎮の上層部にまで深く入り込み、五代史を切り拓いていく様相が明らかになってきた。

一方で、河北と同様に重要なのが河南（本稿では、黄河以南、淮河以北の洛陽周辺から山東半島までの地域を指す）である。この一帯では唐末、龐勛の乱・黄巢の乱が相次いで勃発しており、実質的に唐王朝を滅ぼす要因を生み出し

たという意味では、河北にも引けをとらない重要性を持つ。そのため河南においても、唐から五代へという時代展開を踏まえつつ、隣接諸地域の動向にも配慮した新たな研究が求められる。

さて、河南には、泰山・嵩山を中心とする山岳地帯が広がっており、山東半島は海上交通の要衝としても知られる⁽²⁾。この地域では、河北のように活発な遊牧民やソグド人の活動は確認されていない。しかし史料を精査してみれば、河南の山岳地帯には「山棚」と呼ばれる山地狩猟民が、山東半島には海上交易を生業とした新羅人等の海商が存在したことに気付く。さらに彼らは藩鎮、とりわけ平盧節度使と接触していた。

平盧節度使は開元年間、安祿山を初代節度使として營州に設置されたが、安史の乱中に渤海を渡り、鄆州を会府に最大一五州にも及ぶ大版図を築いた、河南屈指の有力藩鎮である。その藩帥位は李正己以下、息子の李納、孫の李師古・李師道へと四世約六〇年に亘り世襲された。ただし、先行研究では唐朝廷との対立や活発な海上交易に主眼が置かれており、周辺諸藩鎮間での平盧節度使の位置づけは明瞭とはいえない。

そこで本稿では、第一章で徳宗・憲宗期（七七九～八二〇）を中心に河北・河南における藩鎮間の種々の交渉に注目し、その中で平盧節度使が展開した対藩鎮外交とその意味を分析する。次に第二章では、その軍団の特徴を、經濟・軍事両面から考察し、平盧節度使と海商・山地狩猟民との関係を明らかにする。最後に第三章で、平盧節度使の海商・山地狩猟民に対する働きかけに垣間見られる僧侶や寺院の存在に注目する。本稿はそのことによって、河南の藩鎮及びその下で活躍した諸勢力の唐代史上の役割を解き明かすものである。なお、本稿では史料が煩瑣なため、原文の引用は特に必要な場合のみに留め、複数回使用する史料や長文史料については番号を附した。

第一章 徳宗・憲宗期の河北・河南情勢

(1) 河北の藩鎮間外交と平盧節度使

本章では、主に徳宗・憲宗期を中心に、河北・河南の藩鎮の外交関係の分析を通して、相対的な平盧節度使の重要性を明らかにする。ただし論を進める前に、安史の乱収束直後の代宗期から徳宗の建中年間頃までの情勢を、簡単に概観しておく。代宗期には、旧安史軍から成る河北・河南の諸藩鎮（魏博節度使・平盧節度使等）が、成徳節度使李宝臣を中核とし、緩やかなまとまりを形成していた。⁽⁴⁾ところが、李宝臣が徳宗の建中二年（七八二）正月に死ぬと、息子の世襲の可否を端緒に、諸藩鎮は唐朝廷に反旗を翻した。⁽⁵⁾足かけ六年に及んだ一連の反乱（本稿では仮に「建中の反乱」と呼ぶ）の最中、成徳節度使では李宝臣の息子を殺害した武將の王武俊（在任…七八二～八〇二）が藩帥位を奪った。また、魏博・平盧両節度使でも、藩帥の世代交代が起こった。

こうした状況の変化は、藩鎮同士の外交関係にも如実に反映されたと思われる。そこで本節では、主に河北を中心に、「建中の反乱」後の状況を整理していく。当時河北には、代宗期から存在した魏博・成徳・盧龍節度使に加え、義武節度使が新設されていた。また、河南の平盧節度使も頻繁に関連記事に登場する（次頁〔地図〕参照）。

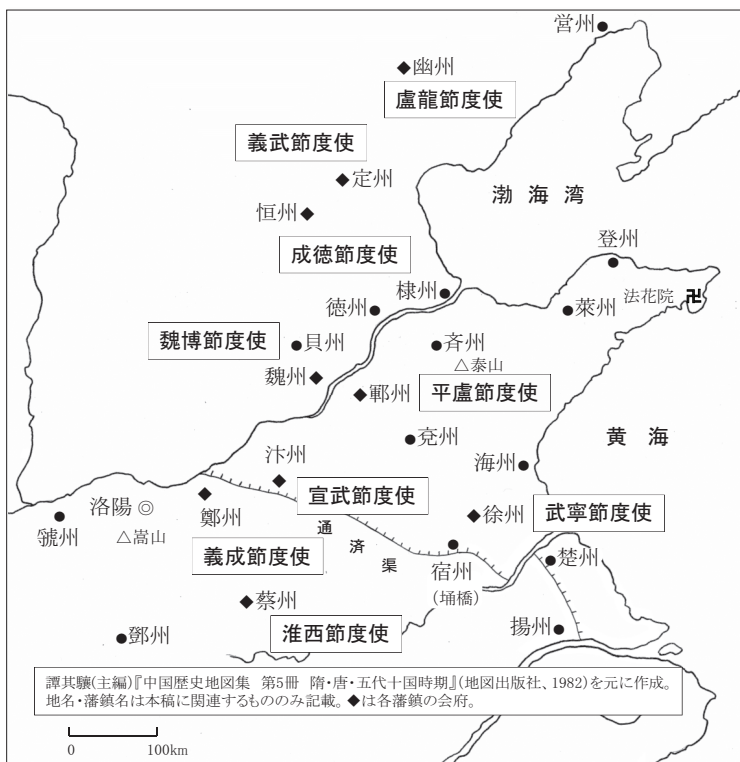
これら諸藩鎮の外交関係の中で、まず注目したいのが平盧節度使と成徳節度使である。実は「建中の反乱」後、両者は、以前にはみられなかった軍事衝突を頻繁に繰り返すようになる。例えば『旧唐書』卷一二四、李師古伝（中華書局標点本、三五三七頁）には、次のようにある。

唐後半期における平盧節度使と海商・山地狩猟民の活動

新見

第九十五卷

六一



〔地図〕 德宗・憲宗期の藩鎮（河北・河南地域）

〔史料1〕 成德軍節度王武俊、師を率いて德・棣二州に次り、將に蛤蜊及び三汊城を取らんとす。棣州の鹽池は蛤蜊に與いて、歲ごとに鹽數十萬斛を出だす。棣州の淄青（平盧節度使）に隸するや、其の刺史李長卿、城を以て朱滔（盧龍節度使）に入るも、而れども蛤蜊は納（李納。平盧節度使。在任…七八二〜七九二）の據る所と爲り、城に因りて之を戍り、以て鹽利を専らにす。其の後、武俊は朱滔を敗るの功を以て、德・棣二州を以て之に隸するも、蛤蜊は猶お納の戍と爲る。納、初め德州の南に河を跨ぎて城きて以て之を守り、之を三汊と謂い、田緒（魏博節度使。

在任…七八四～七九六」と交わりて以て魏博の路を通り、而して德州を侵掠すれば、武俊の患と爲る。納、卒するに及び、師古（李師古。李納の子。平盧節度使。在任…七九二～八〇六）之を繼ぐ。武俊、其の年弱にして初めて立ち、舊將多く死するを以て、心は頗ぶる之を易どり、乃ち衆兵を率い、蛤蜊・三汭を取るを以て名と爲し、其の實、納の境を窺わんと欲す。師古は棣州の降將趙鐔をして之を拒ましむ。武俊は其の子士清をして兵を將て先に滴河を濟らしめんとするに、會たま士清の營中に火起れば、軍驚きて之を惡み、未だ進まず。德宗、遣使して諭旨せしむれば、武俊即ち罷めて還る。師古は三汭口城を毀ちて詔旨に従う。

〔史料1〕は、棣州下の塩產地、特に蛤蜊（棣州有数の産塩量の多い塩池か）を巡る平盧・成徳兩節度使の対立を伝えている。德州・棣州は元々平盧節度使領だったが、最終的には成徳節度使に帰属した。ところが平盧節度使李納は依然、蛤蜊を保持しており、三汭城を築いて德州を襲撃した。これに対して成徳節度使も、李納の死没に乗じて平盧節度使に侵攻した。成徳節度使との領土問題は、李納・李師古二代に亘って継続されることとなる。

これに加え、李納は德州を攻撃する際、「田緒と交わりて以て魏博の路を通」っている。魏博節度使の田緒は、李納とよしみを通じ、成徳節度使攻撃の進軍路を提供していたのである。さらに貞元六年（七九〇）、棣州の帰属を巡り平盧・成徳節度使間に軍事衝突が起きた時も、田緒は詔と偽って棣州を李納に帰属させようとしており、怒った成徳節度使は魏博節度使領の貝州に侵攻した。平盧節度使と成徳節度使との軍事衝突は、魏博節度使まで巻き込む事態に発展してしまったのである。

次に、成徳・義武・盧龍三節度使間の関係を確認する。実はこの三鎮は、互いに「私隙」即ち私的な軋轢を抱え

ており、元和二年（八〇七）八月にはそれぞれが讒訴のため、唐朝廷に上奏を行った⁽⁸⁾。その具体的な軋轢については、断片的ながら史料から窺うことができる。

すなわち盧龍節度使は、「建中の反乱」時、反乱に誘ってきたはずの成徳節度使に裏切られ、さらに完膚なきまでに撃ち破られてしまった⁽⁹⁾。そのため盧龍節度使が成徳節度使を恨んでいたのは当時周知の事実で、唐朝廷は「燕・趙の怨みを爲すは、天下に知らざる無し」⁽¹⁰⁾（『資治通鑑』卷三三八、元和四年（八〇九）条、中華書局標点本、七六七〇頁）と、当の盧龍節度使劉濟は「天子、我の趙を怨むを知る」⁽¹¹⁾（『新唐書』卷二二二、劉濟伝、中華書局標点本、五九七四頁）と語っている。

また、義武・成徳節度使間にも感情的対立があった。義武節度使は成徳節度使から分離独立した藩鎮で、初代藩帥、張孝忠の武勇と知略は以前から王武俊と並称されていた⁽¹²⁾。王武俊は對抗意識からか平生彼を軽んじていたが、⁽¹³⁾対する張孝忠の息子張昇璘も、面罵する程王武俊の人柄を軽視していた⁽¹⁴⁾。これに怒った王武俊は貞元九年（七九三）、義武節度使の会府定州に侵攻し、義豊・安喜・無極の三県を掠奪している。

ただし、この背景について『資治通鑑』卷二三四、貞元九年（七九三）条（七五四三頁）は、「定州は富庶たれば、王武俊常に之を欲するに、是（張昇璘が王武俊を罵った事件）に因りて兵を遣わし、襲いて義豊を取り、安喜・無極の萬餘口を掠し、之を徳・棣に徙す」⁽¹⁵⁾と伝える。王武俊は、常々人庶豊かな定州を欲していたため、張昇璘の軽挙を口実に義武節度使に侵攻したというのである。さらに掠奪後、王武俊は定州の人々を徳州・棣州に徙している。両州は〔史料1〕にあるように、平盧節度使と成徳節度使との係争地だった。成徳節度使の処置は、平盧節度使から

も挑発行為と受け止められかねない。

以上のようにみてみると、「建中の反乱」後の河北では、成徳節度使に対立する平盧・魏博・盧龍・義武節度使、という構図があったことに気付く。中でも成徳・平盧節度使間の德州・棣州を巡る軍事衝突は、隣接する魏博節度使を巻き込んだのみならず、義武節度使との関係にまで波及し得る最大的外交問題であった。

(2) 平盧節度使に対する周辺諸藩鎮の対応

前節を踏まえて次に問題となるのは、成徳節度使を除く平盧・魏博・盧龍・義武の四節度使の関係である。実は、この四者間には、目立った軍事衝突や対立の形跡はない。わずかに前掲元和二年（八〇七）八月の事例から盧龍・義武節度使間に「私隙」が想定されるが、具体的な状況は判然としない。代わって注目されるのは、平盧節度使に対する、魏博・義武両節度使からの子弟の入仕である。そこで、具体的に誰が、どのような立場で入仕したのか、史料から探っていく。

まず、魏博節度使について、『新唐書』卷二一〇、田緒伝（五九三三頁）には、「兄の朝は、李納に仕えて齊州刺史と爲る⁽¹⁶⁾」との記事がある。田緒の兄田朝は、平盧節度使李納麾下の齊州刺史だった。田朝が李納に仕え始めたきっかけは不明である。しかし『資治通鑑』は、德州・棣州の件で田緒が李納側に加担した理由は、李納が密かに田朝を魏博節度使に就けようとしている、という「或る人」の妄言を田緒が信じ、李納の顔色を窺わんとしたためとする⁽¹⁷⁾。実際、李納が魏博節度使の藩帥位への介入を意図していたか否かは分からない。だが、結果的に田朝の存在は、

田緒から李納への援助を引き出した。元和七年（八二二）頃には、平盧節度使李師道（李師古の弟。在任…八〇六～八一九）が宣武節度使韓弘に遣使した際、「我、代^よ田氏（魏博節度使の藩帥一族）と約して相い保援す」⁽¹⁸⁾（韓愈『韓昌黎集』卷三三、碑誌「司徒兼侍中書令贈太尉許國公神道碑」三秦出版社標点本、六七頁）と語っている。平盧・魏博節度使は、おそらくこの頃まで協力的な関係を維持していたのであろう。

また、義武節度使でも藩帥張茂昭の弟、張昇璘（先に王武俊を罵った人物）について「海州團練使の張昇璘は、昇雲（張昇雲＝張茂昭）の弟、李納の婿なり」⁽¹⁹⁾（『資治通鑑』卷三三四、貞元九年（七九三）条、七五四三頁）との記事があり、張昇璘が海州（当時平盧節度使領）團練使に任じられた上、李納の女婿となっていたことが確認できる。先の魏博節度使の例に鑑みれば、義武節度使と平盧節度使の間にも、何らかの協力・提携関係が想定される。

以上のように平盧節度使の下には、魏博節度使から田朝が、義武節度使から張昇璘が入仕していた。しかも平盧節度使は、彼らを決して冷遇せず、州刺史・團練使に任命し、張昇璘に至っては娘まで娶せたのである。ところがこれに対し、魏博・義武・盧龍の三節度使間には、類似の関係があつた形跡は見当たらない。勿論、隣接諸藩が平素全くの没交渉であつたとは思われないが、それにしても義武・魏博両節度使から子弟の入仕を受けている点は、平盧節度使に特徴的な外交政策といつて良い。

このような外交の背景を考える鍵が、河南の漕運、特に通済渠の要衝徐州を巡る攻防である。そこで次節では、徐州と平盧節度使との関係を踏まえ、平盧節度使が魏博・義武両節度使と子弟の入仕を介した提携関係を結んだ理由を明らかにする。

(3) 徐州を巡る攻防と平盧節度使

平盧節度使は、「建中の反乱」以前には最大一五州にも及ぶ版圖を領していた。ところが反乱時、成徳節度使に黃河北岸の德州・棣州を奪われたのに加え、南方では徐州を失ってしまった。徐州は、埤橋（後の宿州）という通済渠の要衝を領していたため、乱後は特別に武寧節度使が新設された。⁽²⁰⁾この措置に平盧節度使の脅威が大いに関係したことは、武寧節度使創設に先立ち、宰相李泌が、「江淮の漕運は甬橋（＝埤橋）を以て咽喉と爲すも、地は徐州に屬し、李納（平盧節度使）に鄰し、刺史の高明應は年少にして事を習わざれば、若し李納の一旦復た異圖有りて、竊かに徐州に據れば、是れ江淮を失うなり。國用何に従りて致さん」⁽²¹⁾（『資治通鑑』卷三三三、貞元四年（七八八）条、七五一六―七五二七頁）と語ったことによく表れている。

通済渠に拠る漕運の利の回復は、平盧節度使の宿願だった。李納は徐州が反した時、激怒し猛攻を加えており、⁽²²⁾その後も兵を徐州境域に駐留させている。⁽²³⁾また永貞元年（八〇五）には、李師古が徳宗の崩御に乘じ、鄭州（通済渠と黃河の結節点）を擁する義成節度使攻撃を図った。⁽²⁴⁾

ところで、徐州奪還の最大の障壁となったのが、他ならぬ成徳節度使である。貞元一六年（八〇〇）五月、武寧節度使の張建封が死ぬと、李師古はこれを機に故地徐州回復のため出兵した。当時の状況を、『新唐書』卷一七七、馮宿伝（五二七七頁）は次のように伝える。

〔史料2〕建封（張建封）卒するに、子の愔は軍中の爲に脅かされて留事を主る。李師古、將に喪に乗じて故地を復さんとすれば、愔大いに懼る。是に於いて、王武俊兵を擁して觀釁すれば、宿（馮宿。武寧節度掌書記）、

書を以て説きて曰く、張公（張建封）は公と兄弟と爲り、共に兩河を力驅して天子に歸せんと欲するは、天下知らざる莫し。今張公は不幸にして、幼兒（張愔）は亂兵の脅す所と爲り、内は則ち誠款隔絶し、外は則ち疆寇侵逼すれば、公安くんぞ坐視するを得んや。誠に能く天子に舊勳を忘れざらんことを奏し、愔の罪を赦し、束身して自ら歸せしむれば、則ち公は靖亂の功、繼絶の徳有らんかな、と。武俊悦び、即ち表聞すれば、遂に愔に留後を授く。⁽²⁵⁾

平盧節度使の侵攻に留後の張愔は大いに震えあがつたが、馮宿は成徳節度使王武俊が兵を動かし「觀釁」、即ち隙を窺っているのに目を付け、彼を説き伏せて張愔を武寧節度使とし、平盧節度使に攻撃の機会を与えなかった。王武俊が何の隙を窺っていたのか、「史料2」からは定かではない。だが、成徳節度使と武寧節度使は境域も接しておらず、直接的かつ顕著な利害関係は認められない。むしろ、本章第一節でみたように、平盧・成徳節度使間に軍事的緊張があったこと、「史料1」で王武俊が「其の實、納（李納）の境を窺わんと欲」していたこと、の二点を踏まえるなら、王武俊の狙いは武寧節度使ではなく、武寧節度使を攻撃する平盧節度使の背後、おそらく德州や棣州方面と考えるのが自然である。

平盧節度使が子弟の入仕を通じて魏博・義武両節度使と提携した背景には、こうした成徳節度使の脅威があったと考えられる。北方の塩産地を巡る軋轢だけならば、平盧節度使も正面から迎え撃てたはずである。しかし南方の徐州奪還にまで手を広げると、どうしても背後に隙ができ、そこを成徳節度使に狙われてしまう。平盧節度使は、この成徳節度使の牽制役を、魏博・義武両節度使に期待したのであろう。魏博・義武両節度使にとっても、領土間

題を巡って敵対していた成徳節度使の背後に控える平盧節度使と結ぶのは、極めて自然な成り行きだったといえる。

以上のように河北・河南の情勢をみていくと、その中で平盧節度使の存在は決して軽視できない。平盧節度使は德州・棣州の塩産地や徐州の漕運等、経済的な要地を中心に軍事行動を展開した。この軍事行動は成徳・魏博・義武という河北を代表する諸藩鎮ばかりでなく、河南の武寧節度使にまでも影響力を及ぼすものだった。

なお、元和五年（八一〇）以降、義武節度使や魏博節度使は唐朝廷寄りの政策へと舵を切るが、逆に平盧節度使は成徳節度使や河南の淮西節度使と結束し、唐朝廷に対抗しようとした。⁽²⁶⁾ こうした動向からも、徳宗・憲宗期において平盧節度使は、河北・河南の諸藩鎮と密接に連動した外交政策を展開していたことが分かる。

第二章 経済・軍事面よりみた平盧節度使

（１）経済的特徴

前章で明らかになったように、平盧節度使は河北から河南に及ぶ広範な軍事行動を展開していた。そのため、次にこの活動を支えた要因として、軍団の経済力や軍事力を考察し、その特徴を明らかにする。

まず経済面であるが、平盧節度使の領域は絹織物や穀物、鉄や銅、塩の一大生産地だった。⁽²⁷⁾ 特に、河南道の絹は、河北道と並んで高品質で知られる。⁽²⁸⁾ また私塩は、内陸の藩鎮との交易品であり、『資治通鑑』卷二三六、順宗永貞元年（八〇五）条（七六〇九頁）には「吳少誠（淮西節度使）は牛皮の鞵材を以て師古（李師古）に遣わし、師古は鹽を以て少誠に資し」⁽²⁹⁾ た事例がある。この淮西節度使への塩輸出は、憲宗期に及んでも依然継続して行われた。⁽³⁰⁾ こう

した商業活動は、平盧節度使の財源となっており、元和年間には「師道（李師道）は軍用屈するを以て、賈人の錢を率^{あつ}めて助けと爲し、悟（劉悟。後の平盧軍都知兵馬使）をして之を督せしむ」⁽³¹⁾（『新唐書』卷二二四、劉悟伝、六〇一二頁）とあるように、商人からの徴税を軍資金として補填している。

さらに特筆されるのは、山東半島や楚州・揚州に築いた拠点によって展開された、新羅・渤海に及ぶ幅広い海上交易である。例えば、渤海からは毎年のように馬を輸入している⁽³²⁾。また、新羅から大量の奴婢がもたらされていたことについては、『唐会要』卷八六、奴婢条（上海古籍出版社標点本、一八六一頁）に詳しい。

〔史料3〕長慶元年（八二二）三月、平盧軍淄青節度使薛平（在任…八一九～八二五）奏すらく、應に海賊の新羅の良口を誅掠し、將に當管の登・萊州の界及び緣海の諸道に至りて、賣^うりて奴婢と爲さんとする者有るべし。…（中略）…先に制勅有りて禁斷するも、當管は久しく賊（李正己以下、李納・李師古・李師道）中に陥るに緣りて、承前は法度を守らず。收復してより已來、道路阻む無ければ、遞相販鬻し、その弊尤も深し。伏して乞うらくは、特に明勅を降し、今起^より已後、緣海の諸道の、應^{あら}有上件の賊の新羅國の良人等を誅賣するは、一切禁斷せんことを。請うらくは、所在の觀察使をして嚴しく捉搦を加え、如し違犯有らば、便ち法に準じて斷ぜしめんことを、と。勅旨すらく、宜しく依るべし、と。⁽³⁴⁾

長慶元年（八二二）三月、平盧節度使薛平は、新羅人の良民が「海賊」（おそらく多くは武装した商人）に略奪され、山東半島の登州・萊州一帯で奴婢として売られていることを訴え、唐朝廷に禁勅を求めた。薛平も「先に制勅有りて禁斷す」と述べているように、彼の上奏に先立つ元和十一年（八一六）には既に、新羅良民掠奪に対する禁勅発

布が確認できる⁽³⁵⁾。この海賊による新羅良民掠奪が、薛平のいう「賊」、即ち以前の平盧節度使の主導だったことは想像に難くない⁽³⁶⁾。このように平盧節度使の下で展開された新羅・渤海との交易は、九世紀中葉以降、中国沿海部や朝鮮半島、そして日本まで股にかけて活躍した新羅商人登場の礎となり、宋代以降の東シナ海交易網へと展開していくこととなる⁽³⁷⁾。

以上のように平盧節度使は、絹・塩等の土産を基盤に、多角的な交易を展開していた。中でも注視されるのは、新羅・渤海との海上交易である。これは他の諸藩鎮にはみられないものであり、平盧節度使が渤海湾や黄海を往来する海商と、積極的に提携していたことを物語っている。

(2) 軍事的特徴

経済的特徴を踏まえた上で、軍団の人的構成を確認したい。平盧節度使は元来安祿山麾下にあったため、軍内には多く営州時代からの武將を擁していたであろう。加えて新規参入者も幅広く募っており、「亡命」や唐朝廷で罪を得た人物も厚く遇して迎え入れた⁽³⁸⁾。また、第一章でみた田朝や張昇璘ら他藩鎮の子弟は、刺史や団練使等、軍団の統率者に任じられていた。さらに辟召も盛んに行っており、例えば渤海人の高沐は、李師古の下で判官にまで上り詰め、李師道擁立の立役者ともなった。その総兵力は、十万とも称されている⁽⁴⁰⁾。

しかしながら、こうした組織構成は平盧節度使に限らない。辟召は言うまでもなく多くの藩鎮で実施されていた。また、「亡命」の招集も、成徳節度使⁽⁴¹⁾・魏博節度使等⁽⁴²⁾にみられる。そのような中で、平盧節度使において特筆すべ

きは、河南の山岳地帯に住む「山棚」という山地狩猟民の存在である。初めに、山棚の概要について『唐会要』巻六七、留守条（一四〇二頁）に依って確認しておく。

〔史料4〕（元和）十年（八一五）十二月、東都防禦使呂元膺、山河の子弟を募り、以て宮城を衛らしめんことを請う。東都の西南は鄧・虢に隣なり、山谷曠遠にして、麋鹿・猛獸多し。人は射獵を習い、耕稼に務めず、春夏は其の族黨を以て遷徙して常無し、俗に呼びて山棚と爲す。前留守の權德輿、其の麋ぎて用うべきを知れば、將に之を請わんとす。（權德輿が）會たま詔徴せられ、故に元膺繼ぎて焉を請う。⁽⁴³⁾

山棚は、洛陽の西南、鄧州や虢州に連なる山中の広大な谷あいに住んでいた。大鹿等を狩猟し、農業は行わず、春夏は一族で連れ立って移動生活を営んでいたという。彼らは山林の奥に住んだ仲間意識の強い好戦的な非漢人で、利害に応じて動き、唐末には茶商となった他、寇賊として各地に出没した。⁽⁴⁴⁾五代期には「山林の獷悍」が兗海節度使（会府・兗州）の募兵に応じている。⁽⁴⁵⁾〔史料4〕にあるように、東都留守の權德輿や呂元膺は山棚の有用性を認識しており、彼らを「山河の子弟」として洛陽の護衛に充ててゐることを提唱していた。

ところが、実は同時期に平盧節度使も山棚の取り込みを画策していた。『旧唐書』巻一二四、李師道伝（三三三九頁）には、次のようにある。

〔史料5〕初め、師道（李師道）、多く田を伊闕・陸渾の間に買い、凡そ十所處、以て山棚を舍きて之に衣食せんことを欲す。訾嘉珍・門察なる者有り、潜かに之を部分し、以て圓靜に屬せしめ、師道の錢千萬を以て偽りて高山の佛光寺を理めんとし、嘉珍の竊かに發するの時を以て火を山中に擧げ、二縣の山棚人を集めて亂を作

さんことを期す。窮して之を按ずるに及び、嘉珍・門察は、乃ち武元衡を賤せでこう者なれば、元膺（呂元膺。東都留守）具に狀して以聞す。⁽⁴⁶⁾

当初、平盧節度使李師道は、伊闕・陸渾という洛陽南方の二県に十か所ほど耕作地を購入し、そこに山棚を安置して衣食を支給するつもりでいた。部隊に分けられたこの山棚を牛耳っていたのが、訾嘉珍・門察の二名である。彼らは他に殆ど情報がないが、おそらく山棚の首領クラスであろう。⁽⁴⁷⁾さらに兩名は、円静（第三章で詳述）なる人物の管下に属していた。元々は、洛陽奇襲時には訾嘉珍が山中に狼煙を上げ、二県に安置した山棚を集めて乱を起こす計略だった。また、訾嘉珍・門察は武元衡（当時の宰相）の暗殺者でもあった。つまり山棚は平盧節度使の下で、陽動や攪乱を担って暗躍していたのである。当時、唐朝廷は憲宗の下で藩鎮抑圧策を展開していた。そのような、公然と軍勢を動かせば反乱とも見做されかねない状況下において、山棚部隊は平盧節度使にとって、対唐朝廷の軍事行動を任せられる切り札になっていたのである。

本章での考察から、平盧節度使の経済・軍事的特徴は、海上活動を展開した海商、及び山岳地帯に居住していた山棚の起用にあることが分かる。しかし、「史料4」にもあるように、山棚は平盧節度使だけではなく、唐朝廷にも加担し得た。また、海商についても、新羅商人が新羅王権に接触した事例がみられる。⁽⁴⁸⁾山棚・海商は双方共に、決して平盧節度使のみに帰属意識を持っていた訳ではないのである。さらに、海商が海上を往来したのは勿論のこと、山棚も季節毎に遷徙しており、両勢力は非常に機動性と流動性の高い集団だったことが窺える。そのため、平盧節度使が彼らを簡単に手なずけることはできなかっただろう。

それでは平盧節度使は、いかにして山棚・海商と接点を持ったのだろうか。実は、山棚・海商の史料には、いずれも僧侶、或いは寺院が登場する。そこで以下では、この僧侶や寺院が、平盧節度使と山棚・海商との接触到果たした役割を探りたい。

第三章 平盧節度使による山棚と海商の掌握

(1) 高山僧侶と山棚

まず、平盧節度使が山棚を掌握する際の具体例について検討していく。この時注目したいのが、「史料5」で登場した、仏教僧の円静である。そこで本節では「史料5」に加え、その直前の文章である『旧唐書』卷一二四、李師道伝（三五三八―三五三九頁）を「史料6」として挙げ、円静の所属・経歴等を考察する。

元和十年（八一五）、平盧節度使李師道は、淮西節度使討伐中の唐朝廷の後方攪乱を目論み、洛陽の出先機関である進奏院に「賊」を潜ませ、宮殿を焼き打ちしようとした。事前にそれを知った東都留守の呂元膺は進奏院を包囲したが、「賊」は呂元膺軍の隙をついて囲みを突破し、城外へと逃げてしまう。以下はそれに続く部分である。

〔史料6〕賊は長夏門を出で、轉じて郊墅を掠し、東して伊水を濟り、高山に入る。元膺（呂元膺）は境上の兵を誡め、重く購^{あがな}いて以て之を捕えんとす。數月にして、山棚の鹿を市に鬻ぐもの有り。賊遇たま之を奪うに、山棚走りて其の黨を徴し、或いは官軍を引きて共に之を谷中に圍み、盡く之を獲らう。窮理して其の魁首を得れば、乃ち中岳の寺僧圓靜、年八十餘、嘗て史思明の將たりて、偉悍たること人に過ぐ。初め之を執らうるに、

巨力なる者をして鎚を奮わしむるも、脛を折ること能わず。圓靜罵りて曰く、鼠子め、人の脚を折らんとして猶お能わず、敢えて健兒を稱さんや、と。乃ち自ら其の足を置きて之を折らしむ。刑に臨みて、乃ち曰く、我が事を誤てるは、洛城をして流血せしむるを得ざるなり、と。死者凡て數十人なり。⁽⁴⁹⁾

賊は長夏門から逃げ出すと、周囲の村落を略奪した後、伊水を渡って嵩山に入った。数か月後、主犯として捕えられたのが、円靜であった。円靜は、〔史料6〕中では「中岳の寺僧」と、また他の史料では「嵩山の僧⁽⁵⁰⁾」と紹介されている。即ち彼は、平盧節度使側の軍人でも、山棚でもなく、嵩山寺院の僧侶だったのである。

嵩山は、五岳体系の中岳として、また六世紀前半に達磨が禪宗を開いた場所として知られる。唐代は少林寺を筆頭に、確認できるだけで三〇ほどの寺院が存在した。⁽⁵¹⁾さらに、太宗の拳兵を助けて以来唐朝廷との関係が深く、北宗禪の高僧神秀・普寂らは、則天武后や玄宗の帰依を受けた。⁽⁵²⁾円靜は、このように政治的にも強大な影響力を持つ嵩山仏教界を背後にしていたのであり、決して一介の僧侶とみることとはできない。

円靜は、今回の陽動作戦の「魁首」だったばかりか、先の〔史料5〕でも、部隊に分けた山棚を「以て円靜に屬」したとされており、山棚部隊の統率者であったことが分かる。いずれの作戦も本来は平盧節度使の企図だったが、少なくとも〔史料5、6〕では平盧節度使側の武將が両作戦の実働部隊を指揮した明確な痕跡はみられず、あくまで円靜が「賊」や「山棚」のような無法者達を扇動している。つまり円靜は、平盧節度使による一連の陽動作戦の実質的な指揮官であった。

そもそも円靜は、〔史料6〕に「嘗て史思明の將」であったと記されるように、安史の乱時は史思明軍の武將だっ

たため、軍事上の経験・知識があつた。さらに、死に臨んでの「我が事を誤てるは、洛城をして流血せしむるを得ざるなり」という、洛陽を血の海にできなかったと嘆く捨て台詞は、乱後五〇年以上経つてなお彼が唐朝に怨恨を抱いていたことを物語る。元を辿れば安祿山麾下にあり、当時唐朝廷とも対立していた平盧節度使が接近するには、格好の人材であつたといえよう。加えて嵩山の立地は、すぐ北の洛陽攻撃に便があつた。

しかも円静が僧侶であつたことは、平盧節度使が嵩山側と接触する口実を容易にした。「史料5」に「師道の錢千萬を以て偽りて嵩山の佛光寺を理めんとし」た記事がある。これが寄進の名を借りた李師道からの軍資金提供、もしくは賄賂だったことは文脈から明らかである。おそらくこの仏光寺が、円静の居寓していた寺院であろう。元々藩鎮下では仏教信仰が盛んであり、平盧節度使でも藩帥侯希逸が仏教に心酔していた。⁽⁵³⁾ 寄進という口実は、無理のないものである。

なお、平盧節度使との癒着が円静個人なのか、仏光寺や嵩山といった教団全体なのかは判断し難い。しかし、嵩山を拠点とした北宗禪は、安史の乱以降、南宗禪の台頭や唐朝廷の密教への傾倒を受け、次第に衰退し始めていた。⁽⁵⁵⁾ この窮状を受け、仏光寺、或いは高山教団が密かに藩鎮からの資金援助に期待を寄せていた可能性は否定できない。では次に、円静と山棚との接点を考察する。まず、円静のいた高山自体が、元々山棚の活動領域だった。「史料6」では、賊が嵩山中に逃亡したが、ある山棚人が、賊に鹿を奪われたことに怒り、「走りて其の黨を徴し、或いは官軍を引きて共に之を谷中に圍み、盡く之を獲ら」えた。ここで山棚人が賊ではなく唐朝廷に味方した理由としては、彼が目先の利害を優先したため、或いは一連の作戦に全く関与しない別の「黨」だったため等が考えられる。

しかしいずれにせよ、賊は「谷中」で山棚に包囲・捕縛された。賊は元々高山に逃げ込んでいるので、この「谷中」は高山の谷中を指すと考えて良い。よって高山には、山棚が「黨」を成すほどの集団で生息していたことが分かる。高山は突起した一つの山ではなく、一帯に嵩山山脈の広がりを持つている。狩猟に適した谷あいや獲物となる獸類等、山棚が生活する種々の条件は整っていたのであろう。

さらに、この時山棚人が「鹿を市に鬻」いでいたことは、彼らが深山の奥に潜む下界と隔絶された集団ではなく、定期的に山中で採れた物産を平地民と交換する等、外部と経済交流の場を持っていたことを示す。定期市は、都城内やその周辺だけでなく、山間部にも多く存在した。⁽⁵⁶⁾ 山棚は鹿を奪った賊を即座に追撃しているので、「史料6」の市の開催地は高山周辺と考えられる。⁽⁵⁷⁾

加えて寺院も、高山における経済活動の場として看過できない。⁽⁵⁸⁾ 当時、寺院は広大な土地と多数の奴婢を所有しており、高利貸しや邸店経営等、商業施設の側面も持っていた。また、医療等の慈善事業や土木事業も展開していたため、薬草・木材等、山林資源の一大消費者でもあった。こうした嵩山寺院の需要を満たすため、山棚がもたらす物産が求められたことは想像に難くない。その経済活動が、山棚と嵩山寺院、そして嵩山僧侶との結合を可能にしたのである。

円静が山棚を統率し得たのは、こうした地理的・経済的事情を背景に山棚と恒常的な交流があったためであろう。高山の寺院は、平盧節度使と山棚との媒介拠点として、機能していたのである。

(2) 赤山法花院と平盧節度使

次に、平盧節度使による海商掌握方法を検討したい。だが、残念ながら、徳宗・憲宗期はこの点を考察する史料に乏しい。そこで、いささか時期が下ることを承知の上で、八三八～八四七年に入唐した日本僧円仁の日記『入唐求法巡礼行記』（以下、『行記』）を頼りに考察を進めていく。

円仁の頃、活躍した海商は専ら新羅商人である。⁽⁵⁹⁾山東半島の登州赤山浦には、法花院（赤山法花院）という彼らの寄港地・交易拠点があった。⁽⁶⁰⁾これは八二〇～八三〇年代、新羅商人張保臯によつて建造された寺院で、倉庫・旅館等の機能も持ち、唐に在住した新羅人の信仰・結束の拠り所となっていた。⁽⁶¹⁾

これら新羅人・新羅商人の活動を監督するため、登州には、勾当新羅所という新羅人管理機関や、新羅館という使節・商人の宿泊所が設けられていた。⁽⁶²⁾さらに平盧節度使は、法花院にも管理の手を伸ばしている。法花院と平盧節度使との関連は既に近藤二〇一一で指摘されているが、本稿では今一度、円仁が最初に法花院を紹介した『行記』巻二、開成四年（八三九）六月七日（小野一九六四、第二卷、五〇頁の原文と書き下しを参照）の記述を挙げ、平盧節度使と法花院の関係を探りたい。

〔史料7〕（六月）七日、午の時、乾の風吹く。帆を擧げて進行す。未申の際、赤山の東邊に至りて船を泊どむ。乾の風大いに切なり。其れ赤山は純に是れ巖石の高秀なる處、即ち文登縣清寧郷赤山村なり。山裏に寺有り、赤山法花院と名づく。本は張寶高（＝張保臯）の初めて建つる所なり。…（中略）…當今は新羅通事押衙の張詠及び林大使・王訓等が専ら勾當す。⁽⁶³⁾

円仁によれば、法花院の創建者は確かに張保臯だったが、現在の管理人は張詠以下、林大使・王訓らであった。林大使・王訓については詳細が不明なので、ここでは筆頭の張詠に注目したい。張詠は唐在住の新羅人有力者であり、⁽⁶⁵⁾円仁の求法にも大いに貢献した。円仁は、実に多くの張詠の肩書きを記録している。この肩書きを分析すれば、張詠の所属、引いては法花院の管理主体が明らかになる。

円仁が記録した張詠の肩書一覧が、次頁〔表〕である。この内、彼の所属を最も明確に示すのは、No. 12の「平盧軍節度同十将兼登州諸軍事押衙」である。「同十将」(No. 12、15、18)及び「押衙(軍事押衙)」(No. 1～12)は、いずれも藩鎮下の軍将に与えられた肩書であるが、No. 12によって、張詠が登州の押衙であり、また登州を管轄する平盧軍節度使の同十将であったことが明白となるのである。⁽⁶⁶⁾

特に押衙は、地域・時期によって地位の高下はあったものの、本質的には節度使の親任厚い者が任じられた要職であった。⁽⁶⁷⁾そのため、藩鎮内の様々な職掌を兼任しており、使者派遣や交易等、外交関係の庶務に携わることもしばしばであった。⁽⁶⁸⁾張詠が帯びていた「新羅通事」(新羅語通訳。No. 2)や「勾当新羅使」(登州一带の新羅人管理担当。No. 10、18)は、彼が対新羅関係の専任者だったことを物語る。実際に張詠は、法会への参加⁽⁶⁹⁾によって、法花院及びそこに集まる新羅人との紐帯を築いていた。山東半島を中心に広がっていた広範な新羅人居留地の存在や、⁽⁷⁰⁾第二章でみた平盧節度使による活発な対新羅交易の展開という背景を考慮すれば、張詠は平盧節度使内において、外交的に極めて重要な役割を担っていたといえよう。

このように平盧節度使の要職にあった張詠による法花院管理体制は、法花院と平盧節度使との密接な結びつきを

〔表〕『行記』にみえる張詠の肩書

No.	年号	西暦	張詠の肩書	典拠
1	開成四	839	張押衙	卷1、4月8日
2	〃	〃	新羅通事押衙張詠	卷2、6月7日
3	開成五	840	当州（登州）軍事押衙張詠	卷2、正月20日
4	〃	〃	押衙	卷2、正月20日
5	〃	〃	押衙	卷2、正月21日
6	〃	〃	押衙	卷2、正月27日
7	〃	〃	押衙	卷2、正月20日
8	〃	〃	張押衙	卷2、2月1日
9	〃	〃	張押衙	卷2、2月1日
10	〃	〃	勾当新羅使張押衙	卷2、2月19日
11	〃	〃	張押衙	卷2、2月24日
12	会昌五	845	平盧軍節度同十将兼登州諸軍事押衙張詠	卷4、8月27日
13	〃	〃	大使	卷4、9月22日
14	会昌七	847	張大使	卷4、2月
15	大中元	847	張同十将	卷4、3月10日
16	〃	〃	張大使	卷4、3月10日
17	〃	〃	登州張大使	卷4、6月10日
18	〃	〃	勾当新羅使同十将張詠	卷4、7月21日
19	〃	〃	張大使	卷4、8月9日

示唆する。元々、法花院自体は新羅商人の創建であつた。しかし平盧節度使は張詠を通じて、法花院、及びそこで展開される新羅人の交易活動を把握していたのである。言い換えれば法花院は、平盧節度使と新羅商人との結節点であつた。新羅商人にとつても、平盧節度使との接触は、山東半島での商業活動を円滑に進める上で極めて魅力的だつたであろう。

このとき興味深いのは、勾当新羅所や新羅館等、唐側が設置した新羅人管理機関が存在するにも関わらず、平盧節度使が敢えてそれらに加え、法花院までも管理下に置いていたことである。先に山棚を使喚した事例でも、平盧節度使は洛陽南方の耕作地に山棚を安置しただけでなく、嵩山の寺院を仲介役利用していた。両事例の共通点は、仏教寺院が、平盧節度使と山棚・海商が結節する

場として機能していたことである。これらの拠点掌握は、平盧節度使が山棚・海商からの軍事力・経済力を確保するために、極めて有効な方法だったといえる。

おわりに

本稿の考察をまとめると、以下ようになる。

平盧節度使は、河北方面では塩産地の帰属を巡って成徳節度使と対立していた一方、河南方面では漕運の要衝である徐州奪還を画策していた。そのため、徐州攻略の隙を背後から狙う成徳節度使を牽制するべく、魏博・義武両節度使と結んでいた。平盧節度使の動向は、当時の河北・河南の藩鎮を巡る情勢を大きく左右していたのである。

その軍構成の特徴として、経済的には内陸・海上双方に亘る交易網が、軍事的には召募に応じた人材や山地狩猟民の山棚によって構成された、十万にも及ぶ軍団の存在が挙げられる。中でも新羅・渤海との間で行われた海上交易は、宋代以降の東シナ海交易の基礎を築いたものとして評価できる。また、山棚は、正規の軍団を動員しにくい隠密作戦にあつては、主力部隊として活躍し、平盧節度使の軍事作戦を支えた。

そして、海商・山棚と平盧節度使との介在拠点として特に注目されたのが、仏教寺院である。平盧節度使は、自らの軍將を寺院の管理者に任命する、或いは寄進をする等の行為を通じて、寺院を活動の場とする海商・山棚から、経済力・軍事力を徴収した。藩鎮にとって寺院は、単なる信仰の対象だったのみならず、現実的な利用価値も高かったといえる。

海商・山棚は元来、季節ごとに移動する性質を持っていた。そのため、既存の拠点である寺院を活用して軍団に組み込んだ平盧節度使の方法は、彼らを統制のとれた軍団に組織し直すよりは非常に効率的である。その結果、平盧節度使の下には、山岳地帯から海上まで含む多様な地理環境に住んだ人々が集結することになったのである。

なお、本稿で検討した九世紀は、陸域においては吐蕃やウイグルが滅亡し、海域においては従来の国家使節団のみならず、民間交易船による往来が出現した、東部ユーラシア全体規模での画期であった。⁽⁷¹⁾ この変動はやがて一三世紀、モンゴルの下での、陸域・海域双方の交易網の一体化へと収斂してゆく。⁽⁷²⁾ こうした広域のかつ長期的な視座に立てば、平盧節度使の活動は、陸上に在った集団と、当時勢力を拡大しつつあった海上の集団とが結託を試みた萌芽の事例として、位置づけることができるであろう。平盧節度使は、海上交易の活発化という時代の趨勢に敏感に対応しつつ、山地狩猟民等、内陸の諸勢力をも軍団に包含することで、周辺諸藩鎮や唐朝廷を脅かすほどの強勢を誇ったのである。

参考文献（著者名五十音順。再録の場合は再録の頁数を記載）

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 荒川正晴 二〇一〇『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会。 | 榎本 渉 二〇一〇『僧侶と海商たちの東シナ海』（講談社選書メチエ四六九）講談社。 |
| 石見清裕 二〇〇九『唐代の国際関係』（世界史リブレット九七）山川出版社。 | 大澤正昭 一九七三「唐末の藩鎮と中央権力」『東洋史研究』三三―二、一一―二二頁。 |
| | 小野勝年 一九六四『入唐求法巡礼行記の研究』（全四卷）鈴木学術財団。 |

鎌田茂雄 一九九九『中国仏教史 第六卷 隋唐の仏教(下)』東京大学出版会。

蒲生京子 一九七九「新羅末期の張保皐の抬頭と反乱」『朝鮮史研究会論文集』一六、三九—七〇頁。

姜伯勤 二〇一一『唐五代敦煌寺戶制度(増訂版)』中国人民大学出版社。

金文経 一九八四「唐代高句麗遺民의(の) 藩鎮」『唐代의(の) 社会와(と) 宗教』崇実大学校出版部、三五—六一頁。

二〇〇一(高慶秀訳)「在唐新羅人社会と仏教」『アジア遊学』二六、六一—二二頁。

氣賀澤保規 二〇〇一「九世紀の山東」『アジア遊学』二六、六七—七七頁。

権恵永 二〇〇五『在唐新羅人社会研究』一潮閣。

嚴耕望 一九六九「唐代方鎮使府僚佐考」『唐史研究叢稿』新華研究所、一七七—一三六頁。

近藤浩一 二〇一一「登州赤山法花院の創建と平盧軍節度使・押衙張詠」『京都産業大学論集』(人文科学系列) 四四、一五四—一六九頁。

史念海 一九九四「隋唐時期運河和長江的水上交通及其沿岸都會」『中国歴史地理論叢』一九九四—四(再録)『唐代

唐後半期における平盧節度使と海商・山地狩獵民の活動

歴史地理研究』一九九八、中国社会科学出版社、三一三—三三二頁。

椎名宏雄 一九六八「嵩山における北宗禪の展開」『宗学研究』一〇、一七三—一八五頁。

宋卿 二〇一〇「唐代平盧節度使略論」『中国辺疆史地研究』七六—二、四五—五二頁。

孫慧慶 一九九二「唐代平盧節度使南遷之後瑣議」『北方文物』三三—四、七三—七九頁。

高瀬奈津子 二〇〇二「第二次大戦後の唐代藩鎮研究」堀敏一(著)『唐末五代変革期の政治と経済』汲古書院、二二五—二五三頁。

田中俊明 二〇〇三「アジア海域の新羅人」京都女子大学東洋史研究室(編)『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学、一一—七四頁。

辻正博 一九八七「唐朝の対藩鎮政策について」『東洋史研究』四六—二、九六—一二五頁。

鄭炳俊 二〇〇四「李正己一家의(の) 交易活動과(と) 張保皐」『東国史學』四〇、五二三—五六〇頁。

二〇〇七「李正己一家의(の) 藩鎮과(と) 渤海國」『中国史研究』五〇、一二五—一二八頁。

新見まどか 二〇一二「唐代後半期における「華北東部藩鎮

新見

連合体」『東方学』一二三、二〇—三五頁。

樊文礼 一九九三「唐代平盧淄青節度使略論」『煙台師範学院学报』（哲社版）一九九三—一、二七—三三頁。

一九九四「登州与唐代的海上交通」『海交史研究』二六—二、二五—三四頁。

日野開三郎 一九四二「支那中世の軍閥」三省堂（再録：日野一九八〇、二三—一七一頁）。

一九六六「唐代之戦乱と山棚」『軍事史学』二（再録：日野一九八〇、四九三—五一六頁）。

一九七〇『統唐代邸店の研究』（再版：三二書房、一九九二）。

一九八〇『唐代藩鎮の支配体制』三一書房。

馮金忠 二〇一二「唐代河北藩鎮統治下的仏教」『唐代河北藩鎮研究』科学出版社、一二二—一四一頁。

馮培紅 一九九七「晚唐五代宋初婦義軍武職軍將研究」鄭炳林（主編）『敦煌婦義軍史專題研究』蘭州大学出版社、九四—一七八頁。

堀敏一 一九九八A「唐代新羅人居留地と日本僧円仁入唐の由来」『古代文化』五〇—九、四七—五三頁。

一九九八B「在唐新羅人の活動と日唐交通」『東アジアのなかの古代日本』研文出版、二六九—三〇三頁。

道端良秀 一九八五『中国仏教社会経済史の研究』書苑。

森部豊 二〇一〇『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版社。

柳田聖山 一九六〇「唐末五代の河北地方に於ける禪宗興起の歴史的社会的事情について」『日本仏教学会年報』二五、一七一—一八六頁。

一九六七「中国禪宗史」西谷啓治（編）『禪の歴史』（講座禪 第三卷）筑摩書房、七一—〇八頁。

山内晋次 二〇一一「東アジア史」再考『歴史評論』七三三、四〇—五六頁。

山崎覚士 二〇一〇「五代十国史研究」遠藤隆俊他（編）『日本宋史研究の現状と課題』汲古書院、三二五—三四五頁。

李基東 二〇〇一（近藤浩一訳）「張保皐とその海上王国（上下）」『アジア遊学』二六、一一七—一三〇頁／二七、一三七—一五三頁。

渡辺孝 一九九一「唐・五代の藩鎮における押衛について（上）」『社会文化史学』二八、三三—五五頁。

一九九四「唐藩鎮十將攷」『東方学』八七、七三—八八頁。

註

- (1) 藩鎮の研究史は、高瀬二〇〇二／山崎二〇一〇参照。
- (2) 河南の地理的特徴は氣賀澤二〇〇一、特に海上交通は樊一九九四参照。
- (3) 最も基礎的な研究は金一九八四。通史は辻一九八七／孫一九九二／樊一九九三／宋二〇一〇、交易活動は鄭二〇〇四／鄭二〇〇七等参照。
- (4) 新見二〇一二、三一頁。
- (5) 「建中の反乱」の発端と経過は、日野一九四二、九五—九八頁／大澤一九七三、三一—六頁参照。
- (6) 成德軍節度王武俊、率師次于德・棣二州、將取蛤蜊及三汊城。棣州之鹽池與蛤蜊、歲出鹽數十萬斛。棣州之隸淄青也、其刺史李長卿、以城入朱滔、而蛤蜊爲納所據、因城而戍之、以專鹽利。其後、武俊以敗朱滔功、以德・棣二州隸之、蛤蜊猶爲納戍。納初於德州南跨河而城、以守之、謂之三汊、交田緒以通魏博路、而侵掠德州、爲武俊患。及納卒、師古繼之。武俊以其年弱初立、舊將多死、心頗易之、乃率衆兵、以取蛤蜊・三汊爲名、其實欲窺納之境。師古令棣州降將趙錡拒之。武俊令其子士清、將兵先濟於滴河、會士清營中火起、軍驚惡之、未進。德宗遣使諭旨、武俊即罷還。師古毀三汊口城從詔。
- (7) 『資治通鑑』卷二三三、貞元六年（七九〇）条、中華書局標点本、七五二—一頁。
- (8) 『資治通鑑』卷二三七、元和二年（八〇七）条、七六三—九頁。
- (9) 『資治通鑑』卷二三一、興元元年（七八四）五月丙子条、七四三—二頁等。
- (10) 燕・趙爲怨、天下無不知。
- (11) 天子、知我怨趙。
- (12) 『旧唐書』卷一四一、張孝忠伝、中華書局標点本、三八五四—三八五五頁／『新唐書』卷一四八、張孝忠伝、中華書局標点本、四七六七頁。
- (13) 『資治通鑑』卷二二七、建中三年（七八二）二月条、七三一九頁。
- (14) 『新唐書』卷一四八、張茂昭伝、四七七〇頁。
- (15) 定州富庶、武俊常欲之、因是遣兵襲取義豐、掠安喜・無極萬餘口、徙之德・棣。
- (16) 兄朝、仕李納爲齊州刺史。
- (17) 『資治通鑑』卷三三三、貞元六年条、七五二〇—七五二二頁。
- (18) 我代與田氏約相保援。
- (19) 海州團練使張昇璘、昇雲之弟、李納之婿也。

唐後半期における平盧節度使と海商・山地狩獵民の活動

新見

第九十五卷

八五

(20) 史一九九四、三三二—三三三頁。

(21) 江淮漕運以甬橋爲咽喉、地屬徐州、鄰於李納、刺史高明應年少不習事、若李納一旦復有異圖、竊據徐州、是失江淮也、國用何從而致。

(22) 『旧唐書』卷一五六、王智興伝、四一三八—四一三九頁／『新唐書』卷一七二、王智興伝、五二〇一—五二〇二頁。

(23) 『旧唐書』卷一五四、許孟容伝、四〇〇九頁。

(24) 『資治通鑑』卷二三六、永貞元年（八〇五）二月条、七六〇三—七六〇九頁。

(25) 建封卒、子愔爲軍中脅主留事。李師古將乘喪復故地、愔大懼。於是、王武俊擁兵觀釁、宿以書說曰、張公與公爲兄弟、欲共力驅兩河歸天子、天下莫不知。今張公不幸、幼兒爲亂兵所脅、內則誠款隔絕、外則疆寇侵逼、公安得坐視哉。誠能奏天子不忘舊勳、赦愔罪、使束身自歸、則公有助亂之功、繼絕之德矣。武俊悅、即以表聞、遂授愔留後。

(26) 日野一九四二、一〇〇—一〇二頁／大澤一九七三、一五一—一七頁。なお、このとき成徳節度使は、藩帥の弟王承慶を李師道の下に入仕させている（『新唐書』卷二二三、李師道伝、五九九五頁）。

(27) 金一九八四、五四—六一頁。

(28) 荒川二〇一〇、四五九—四六〇頁。

(29) 吳少誠以牛皮糝材遣師古、師古以鹽資少誠。

(30) 『旧唐書』卷一四五、吳元濟伝、三九五二頁／『新唐書』卷二一四、吳元濟伝、六〇〇六頁。

(31) 師道以軍用屈、率賈人錢爲助、命悟督之。

(32) 鄭二〇〇四、五五六—五五七頁。

(33) 鄭二〇〇七、一五三—一五四頁。

(34) 長慶元年三月、平盧軍淄青節度使薛平奏、應有海賊該掠新羅良口、將到當管登・萊州界及緣海諸道、賣爲奴婢者。

：（中略）：先有制勅禁斷、緣當管久陷賊中、承前不守法度。自收復已來、道路無阻、遞相販鬻、其弊尤深。伏乞特降明勅、起今已後、緣海諸道、應有上件賊詿賣新羅國良人等、一切禁斷。請所在觀察使嚴加捉搦、如有違犯、便準法斷。勅旨、宜依。

(35) 『冊府元龜』（宋本）卷四二、帝王部四二、元和十一年（八一六）、中華書局影印本、四七頁。

(36) 堀一九九八B、二八四頁／李二〇〇一（下）、一二五頁。

(37) 蒲生一九七九、四七—四九頁／鄭二〇〇四、五五八頁／榎本二〇一〇。

(38) 『旧唐書』卷二二四、李師古伝、三五三七頁。

(39) 『新唐書』卷一九三、高沐伝、五五五六―五五五七頁／『資治通鑑』卷二二七、憲宗元和元年（八〇六）、七六三四頁。

(40) 『資治通鑑』卷二二五、大歴二年（七七七）、七二五〇頁。

(41) 『旧唐書』卷一四二、李宝臣伝、三八六六頁。

(42) 『新唐書』卷二二〇、樂彦慎伝、五九三九頁。

(43) 十年十二月、東都防禦使呂元膺請募山河子弟、以衛宮城。東都西南聯鄆・號、山谷曠遠、多麋鹿猛獸。人習射獵、不務耕稼、春夏以其族黨遷徙無常、俗呼爲山棚。前留守權德輿、知其可廢而用、將請之。會詔徵、故元膺繼請焉。

(44) 日野一九六六、五〇八―五一頁。

(45) 『資治通鑑』卷二九〇、後周広順二年（九五二）五月条、九四七八頁。

(46) 初、師道多買田於伊闕・陸渾之間、凡十所處、欲以舍山棚而衣食之。有訾嘉珍・門察者、潛部分之、以屬圓靜、以師道錢千萬僞理嵩山之佛寺、期以嘉珍竊發時舉火於山中、集二縣山棚人作亂。及窮按之、嘉珍・門察、乃賊武元衡者、元膺具狀以聞。

(47) 山棚出身者が部隊を率いた例は、呉元済の乱時に朝廷側に立った「山河十將董少玢」（『資治通鑑』卷二四〇、元

和二年（八一七）三月己丑条、七七三三頁）等が挙げられる（日野一九六六、五〇七頁）。

(48) 新羅商人張保皐は婚姻等を通じ、新羅中央政界への進出を図っている（蒲生一九七九、六一―六四頁／李二〇〇一（下）一四四―一四六頁）。

(49) 賊出長夏門、轉掠郊墅、東濟伊水、入嵩山。元膺誠境上兵、重購以捕之。數月、有山棚嚮鹿於市。賊遇而奪之、山棚走而微其黨、或引官軍共圍之谷中、盡獲之。窮理得其魁首、乃中岳寺僧圓靜、年八十餘、嘗爲史思明將、偉悍過人。初執之、使巨力者奮鎚、不能折脛。圓靜罵曰、鼠子、折人脚猶不能、敢稱健兒乎。乃自置其足教折之。臨刑、乃曰、誤我事、不得使洛城流血。死者凡數十人。

(50) 『旧唐書』卷一五、憲宗本紀下、四五四頁等。

(51) 椎名一九六八、一七三頁。

(52) 嵩山における北宗禪の展開及び朝廷との関連は、柳田一九六七、二九―三二頁／椎名一九六八等参照。

(53) 特に河北の仏教は、藩鎮の庇護のもとに栄えた（柳田一九六〇、一七六―一七九頁／馮二〇一二）。

(54) 『旧唐書』卷二二四、侯希逸伝、三三三四頁。なお、侯希逸を放逐して藩帥位を奪ったのが従兄弟の李正己。

(55) 柳田一九六七、三三―三四頁／椎名一九六八、一八二―

一八三頁。

(56) 日野一九七〇、九六一—一〇〇頁。

(57) なお、宋代以降、寺院では廟市が開催されるが、唐代の楚州・揚州では既にその萌芽がみられた〔鎌田一九九九、一六九—一七一頁〕。山棚が出没した市の開催地として、嵩山寺院も想定できるかもしれない。

(58) 寺院の経済活動は、道端一九八五／姜二〇一一参照。

(59) 海商、特に新羅商人について、基礎的な論文は蒲生一九七九／李二〇〇一／田中二〇〇三等、著書は権二〇〇五／榎本二〇一〇等参照。

(60) 蒲生一九七九、五九頁。

(61) 金二〇〇一、一三頁／権二〇〇五、九四—九六頁。

(62) 堀一九九八B、二七五頁。

(63) 七日、午時、乾風吹。舉帆進行。未申之際、至赤山東邊泊船。乾風大切。其赤山純是巖石高秀處、即文登縣清寧鄉赤山村。山裏有寺、名赤山法花院。本張寶高初所建也。…(中略) …當今新羅通事押衙張詠及林大使・王訓等專勾當。

(64) 林大使は、文登県の押衙か〔堀一九九八B、二七二頁〕。

王訓は、赤山西方の邵村の村勾當〔『行記』卷二、開成四年(八三九)五月一日、小野一九六四、一七頁〕。

(65) 堀一九九八A、五一頁。

(66) 渡辺一九九四、七頁。

(67) 巖一九六九、二三〇頁／渡辺一九九三、四一—四四頁／馮一九九七、九九—一〇〇頁。

(68) 巖一九六九、二三三頁／馮一九九七、一〇六—一〇八頁。

(69) 『行記』卷二、開成四年(八三九)二月二五日、六一頁等。

(70) 堀一九九八A、四七頁。

(71) 山内二〇一一、四九—五〇頁。

(72) 石見二〇〇九、七八頁。

(大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)